



猿蓑
律

大
少
方
好
好



晉其角席

誰謂乃集つる事古今り
けらるゝは道れおまゝ起通
き時たも此や幻術の身一也
しそるれ白り魂ちん入さき
えゆ免又拖めこゝに似る
あし久し世も〜もら
長くようつらて不愛た愛

ちまら新賜れにまひを呼
ひあ神あゝに懼るまき幻
術たりこれをもえりて此
集をつらりて様そのる岩
付中あきある是の序を
たんをり魂を合せりて素
凡兆乃ほりあたるよやうせ
書

猿蓑集卷之一

冬

ゆーる猿蓑と小蓑をほけ也 芭蕉
あきまけし時雨来はおの緒の 其角
時あまや並いりり新や露 干那
幾分付あかけぬ 流田木橋 文料
袈裟の程振中る志をれ小 正秀
唐沢やいりり時あまは 史邦

舟人子ぬきこゝろ 伊賀の境 尚白

伊賀の境 小入

たまりやちふ良の隣の時 曾良
時ありや木つむ屋の窓あり 凡北
了らて竹田の里やひし 乙品
あまきれ 星の光や小夜時 羽紅
新田小禪 穀畑 昌房
いんかや沖の時ぬれ 帆片帆 素未

しらおよびや北本れ 伊賀 百歳
いんか 勅く地なま 野水

渡りて

いんか 船の中 其角
帰花にうれも 同
禪とれ雲の 凡北
玉音のわろ 嵐
かしや頬腫痛じ人の 芭蕉

砂よけを垂れたるのね木立

凡兆

ちりちり

柳麻のまきちりゆり枯ゆり

伊賀 出芳

流柿をちりちり通る十夜水

膳所 裾道

ちりのれやけり人あき足賀

伊賀 越人 棧 雖

よみり流茶のまきちりちり

古ちれ貴子も青いちりちり

凡兆

為の雲田小深井とよき

雑水のふちりちりちり

其角

こ乃室さ牡丹のまきちりちり

伊賀 車来

卓津

晦日ちりちりちりちり

尚白

神速水にちりちりちり

珍碩

霜月朔旦

猪まらりあは物ちり赤柏

伊賀 良品

水き月れあを種ちり水仙

羽鳥 不王

今ハ世を多めしきりきやあのか
 尾取のころんねとあつ海嵐小
 一晩くさむき深や釣干し菓
 ころんころんに多賀た鳥井のまは
 茶湯くつあしき日よも秘を
 炭竈又も負れ枝の倒さ
 住つぬ娘のころんや並火燧
 寐ころんや火燧蒲団のさめ
 且菓 長法
 去来 伊賀
 探丸
 尚白
 雁翁 伊賀
 元兆
 芭蕉
 其角

門前此小家もあつぬをまふ
 未竟やおそひ切る魚北西
 ころんハ眠るをさうれり
 凡兆 尾張
 友境 伊賀
 半残

分頁文

ましつらそ紙子れ切を譲り
 浦風や巴をくわすら街
 あつ強やころんを街
 根のあと踏消すや濱千鳥
 丈枘
 曾良
 去来
 丈邦

背門に只入るよのほるふるれ 丈牝
 いし道々雪よまふきて鳴千鳥 千那
 矢田のゆや浦のふれな鳴ふる 凡北
 後とれえふる跡や鷺の中 本節
 水底を見て来たこ鳥の小鴨も 丈牝
 ちんちんも寝たをわらう余古の海 路通
 死まで探成らん鷹鷹派うか 且葉
 襟衣をう首門今冬れ月 枚風

有本戸也續のきれて冬れ月 其角
 かし志れ浦園をわらふみの猿 暮年
 又やふさえ旅人さし 石部山 智月
 首出 竹戸
 題竹戸之衾
 魚のけ物乃やせなき蹴り 探丸
 魚のけ我のよれあそ紙衣 曾良
 魚のけ我のよれあそ紙衣 曾良

首出 記あり略す
 表濃

長崎

産尼

表濃

志のまを教珠も柳守網代守 文州

津白砂子俣す

膝つきよかしこまり居る霞れ 史邦

桜欄の糸たぬ又栝ふあり水 野童

鶺鴒乃栝ありこほす 散れ 示蜂伊賀

呼久も新賣ええあふれ水 元兆

こりれ津る青も朝飯の出ま水 晝好膳所

ころちも肉も居やれ人水 七角

ゆきよる雪都をのりく新朗 史邦

まおやけのも代吹くやる雪場 羽紅

わらも子ら丸ねねのこすまらけ 探丸

下京やまをつむよ清夜れぬ 元兆

なみくと川一筋や雪の原 同

信濃路をとるより

ちをらふや穂を共海の刈水 道達

草庵の雪をとくして

衰老の爲もあけと巻れを
其角
鳥羽
鳥羽
後とても健あふハ
卯七
いひかけていりや
去来

青西追悼

乳のこりに世を渡して
尚白
のこりもえやの獲とをれ内
色黒
残つた情ハ
乙丸

一月の家は弟をせらるる
丈州

住吉奉納

夜神ふや鼻息向一
玉角
節子候よ又のうむ
頃琢
あやうさ
日
祐甫

乙品 新定

今よ家どののこせて
色黒
弱法師 家門ゆを餅の札
玉角

歳の夜や曾祖父をひけふ手枕 長和
 うす望れつるをいふの者 去来
 うすてい年法中よけや伊勢の 同
 大とくやふれまを結ぶくさる 羽紅
 中りくれく亦やさびりる朱の 其用
 い海とくふいよまへ年れ暮 路通
 年のくれ破も終れ終るくさる 松風

猿蓑集卷之二

夏

有明の西ゆすやほくきん 其用
 夏ふすも暑きりあや時鳥 木節
 ねをと極よつるしひけふいす 芭蕉
 時鳥りふよむさうりて時鳥 尚白
 何れもいもなを時鳥の 凡兆
 ひるとささのこいさす時鳥 智月

蜀魂なぐや木の瓦角櫓 史邦

入おれひきまの中やほもき 羽紅

ほもきに遊ぶらおそのつられ 丈艸

ふちま代官後やほもきす 去来

こい死を我塚てあけおよ次 奥助

松崎一見のゆきもももや
病のそ衣とよありはれと

雲鶴や病ふれほもき 曾良

うき家をはりかへせよかんと 芭蕉

旅館庭せまき
な草をとえす

お楓葉ふらふは色一はら 膳所 曲水

四月八日詣慈母墓

ふれふらふらふらふら 全孝

ふれふれの花と牡丹は湯水 全孝

別僧

らふふふのふやととと米囊花 越人

ちふふふも人ふふふのふ 師頭

あふ佐られてすまふあしよ
まじりて

似合しよけいの一やむる里 枳園

まふさむい白まゆしけいのみ 尚蘭

井ぬまよしゆ清し 枯翁 半残

起ゆくぬまきされぬ

朝の同乃

起くのんくころかよつんく 仙化

題去来之流俄落柿舎言

互極る初も本魚屋を名起小 凡兆

破垣やりし麻子れがよ道 曾良

南都旅店

誰のそくまじりて乃園此相 千那

洗濯もあふるもぬ柿の志 薄芝

豊園よて

竹の子れかまゆまふらふき 凡兆

あけれ子や白濁り魚たふ 去来

たけのち新よめゆはまき 芭蕉

楮よ吹ふさうらうらうら 正秀

明石夜泊

妙臺やもろけす夢を交は月 芭蕉

君の代や詠唐祭を獨一ツ 越人

五月三日

こころのしるおきて

包福甚かと並くやけき音浦水 其角

粽はふかこふふこむむ顔髪 其角

隈の原茶ふり餅粽 岩公羽

さひさに客人やとまらり水 尚白

五月六日大坂より死の遠志を吊いて

大坂やとぬれは夏乃み十の 蝉吟

奥品なる館にて

笈草や兵たりゆぬる跡 芭蕉

這出よおひる下丸蟻の勢 同

け境をいそりりて

かこつり角ふりては次仍石 同

五月ぬえ家より捨てあふりて

凡兆

い祢妻れ味なきをたぢありる

末節

了との謂次すありさつと雨

史邦

奥加名取の郡よ入中野宮の
場はいつつとちとる行もこ
道より一里まゝるたり乃方
笠原とよまよるはとるゆ
かりつとまゝるちとる
たつとる

笠原やいつこみりれつりの道

芭蕉

大和紀伊のさひとそあ一塚は
てはまの唯れをこちてまか

すめなまこハ粉目つこころ
紙のうに書つけはる

つらもこそあ一坂やみりる

去来

髪利や一夜よ令情なかりぬ

凡兆

日の道や羨然くさ月あえ

芭蕉

継ゆやさしせこもはありぬ

羽紅

七十余の老醫者みまよりけよ
ゆふたこころりてなすま
にいふ4の句をけらりの老醫
いまうりり時しちよん志れ
る人よあさりなまハ衣も
おこいふはてはま

なる年よりとてかく
ゆるさるりなきこと

六尺も力おとすや五月あゑん 只角

百姓も麦は取つく茶摘奇 去来

志くとも茶山よりあぬれ 正秀

つみ合子をれけや麦高 游力

麦葉れ家してやら大雨蛙 智月

麦出きて豊と食ふと家小 花紅

志く川の関して

凡流のくもや奥は田持う 芭蕉

出羽のさよと成るこて

眉掃と面影よしてぬ粧の志 同

法隆寺開帳
南無佛の太子を拜す

伊豫のくもなるやみ粉の志 千那

田の四れ豆つるむり堂くれ 万平

膳所曲水之樓

螢火や吹こはちまて 螢のやこ 去来

歩田乃螢の二句

闇の夜や子を泣出さる螢のこ 凡兆

ほろろとや船頭酔ておぼつれ 芭蕉

之態跡へ訪ふ時

螢火やこおりるよハ鬼尾谷 田上亮 長崎

あれからと物とせりあはぬか 尚白

草じや百合の中こころの虫 半残

病後

空つりやかしらふつと百合の花 大坂 何処

すもや歌りり先よ百合の花 乙品

燻蚊癖を作つて

子やなうん其子の母を蚊の喰ふ 嵐菊

餞別

ちきよや蚊屋もくらの娘の者 膳所 里東

こゝろ成人よふれ 長崎 里東

千の夜をきく冠者よあはれ

涼風や空のあそび車のか
文州

下野や地虫なりし蝉の夢
嵐雪

客よりや舟をよかゆる蝶の勢
探志

秋く死ぬるのよらえす物のみ
芭蕉

衣より音麻州るあまの多岐
櫻市

渡りあそぶ原の花のうら流哉
元兆

舟の書は唱奇の合歡の花
千那

白雨や鐘すくもる日れ夕
史邦

素堂之蓮池道

白るや 蓮一枚の揺あこま
嵐嵐

日焼田や時くくく鳴く蛙
乙刀

日乃暑さ 鹽の底に蟻くれ
元兆

水は月も鼻つきあふに教を
・

日の曇やこくれく思ふ斗れ音
正秀

あそび 舞よりあはれ
中良

志ねんふの敷ゆ風りあつし 野童

夕るよよられてついで思ふが 羽紅

青草湯入るめんあはれさる 巴戸山

千子のあままりわらうと
まいてこのつ國より去来
りこころんやつら

母さく人の小袖を今や古用て 芭蕉

水無月や朝りふぬうきみ 嵐蘭

あゝくは移る涼も夕たれ 宗次

すくはちや新学はな花いひ也 凡兆

唇よ曇つて思ふよとこれ 千那

月鮮や思乃歌終落粧 曾良

夕るよや汎無いころあまのま 去来

くはちの
落よ

あまのこの今のを比敷よ何ぞゆ 大坂 之道

猿蓑集卷之三

妹

穉風や運成ちるる花一つ

不知
讀人

此句東長よりきこふ

素堂の

かいらりとのけしきさや枝の風 枝風

芭蕉茶を何とぬれや妹の風 路通

人よ似て様もよと御杖のせ 珍碩

加賀乃全昌寺に宿す

終夜秋風きくや意のこ 曾良

芦原や鷺の夜ぬねを妹の風 山川

あさもほや櫛耐令高れ秋の心 凡兆

く山露や穂の川芝の起ある 去来

大比叡やこころぬる葉のやみ 野童

こ葉しりて跡をかれ葉や柳の苗 凡兆

文月や六りもまたの夜よ似す 芭蕉

合歡の本れをふうこころ早めけ 同

七夕やあまのいりこころぬし 杜若

こころも似すこころ 相撲取 去来

朝のほろろ寝る方乃出りぬ 風琴

葦やぬるこの意又れほこもす 及肩

菊もも泣よもよさ時本権ぬ 嵐菊

もを愈くゆしてさの木権ぬ 秋風

る地籠いこわくも権ぬ 千那

もくもれく嶽のなる音や煉殿雨、史邦

とよか藪の内より初あし 且東

秋風やとも落はうらうらとす 子尹

迷い子の親めうらやすすき原 羽紅

ハ階おろくに遊びして榮
しもの文をける席もよ
まのまき 楊乃生花房られ 元北

つらしうらうらりそなにいさ
ふ心そや七にふて
思うてもまゝなる成しとれ落 去来

草刈よろ池の思りも秋の露 李自由

え禄二年翁は依せしまて
こころのくうり三秋落まわり
り脚しそまかの国よて
ごころの作りていせまてえ
まをさるとして

いつくまらたれ所とも秋の露 曾良

桐のみにうらうらなる堀の内 芭蕉

百舌鳥あくや入りさし女松原 元北

初序よひ知るるれまらむと 落梧

望田より

病馬は夜さむくあて晴の 芭蕉

海老の屋を小海老ののり 曰

加賀の小車とちふ多田乃
神社の宝物とてまじ
う菊う草乃ふと何く
錦のきれををさす事な
しつまあある懐よぬん

むんやれ甲のトれきらくす 芭蕉

菜園や二葉れ中の虫はあ 尚白

こゝちや望よ来と明夜月よ 楓香

いせよまゝしてさう時

葉月や矢橋よ渡る人よあん 子

三ヶ月に蓋のあま紙をくり 之道

粟稗と目出度ありぬと月 半残

月えせん伏見の城乃換部 去来

翁と帝金言よおして

おもしろく松笠りえは月夜 伊賀 土音

加茂の詣 志ては涙のかみと
かの上人の

たふこのやうに水垣は
なつまでよきしとや

月影や柏木もろく藤のよ 史邦

なまの六條よかこりい
まはまらりたるよ

影やしらさき見送る朝月夜 卓袋

こそ成るやあしうし月の影 乙羽

京筑紫去来月を借中百 丈艸

月影の相やあま月一ツ 九北

ゆりこしてこよひありの月のよ 尚白

向の能きやも月を替くれ 曾良

え禄二年つらうれ清り
月をうんく氣比の月影よ
訪ねり上人の古例を
きいて

月清し越垣のよとる砂乃と 芭蕉

仲妹の望み猶子を送は辭て

うら夜の月もあまなりおと送 去来

明月やあまを去来茶茶あま
膳所 昌房

月見とらくの砦又いりて
牙紅

僧正のいしよの小屋れきあき
尚白

初瀬や鳴門の浪の花柳み
凡兆

一戸や衣もやうりこまむ久
去来

稗の抱れる迹しつるまき
越人

濫糟やかすも喰す荒島
正秀

あやまりてきこむやうの禱
嵐南

一鳥木鳴山更幽

物の音しりたうりあまし
凡兆

しつうもき抱きもんしり
曾良

猿枕麻のつさ合斬る下
千里

鳩やぐや洗掃原の蕎麦麦
珍碩

上りや下るるや種の大
凡兆

鱗釣比もろりし鱈つり
半残

かゝり川のふすむりきし
尚白

菊を切る跡まいつるも
其角

了土よに駱の明ややあらまね 珍碩

この比のやいころや 稻流秋 土北

稻うく母又出原ぬらあいか 凡北

自題落柿舎

梅のや柳をちもあしと 去来

志は浪やゆつと梅の下に糸 賀加松 塵生

肌さじ竹切山のす糸糸 凡北

神田糸

さ流はこころにれの柏子流あめ糸
糸田糸の教り糸
柏子さ(あ)り糸

花すき大各糸をまらり糸 嵐雪

け秋の口五日弱るすき糸 文艸

まゆる秋の夕や風かり 凡北

世の中ハ鶴鶴の尾乃い糸 同

塙夷れ歯よこさうふや妹の糸 荷分

猿蓑集卷之四

春

梅咲て人の怨乃悔もあり

露沾

上臈の山莊より候し

梅の香や山路隔入んかほる

去来

ひびく香や八里半の角

加賀 句空

庭真

梅の香や砂利き流す谷々真

工字方

くろ棟屋宵なき身も梅の香 半残

梅の香や酒のうまみはあはれき 蝉嵐

ひびきのあやけ一筋を露のたり 尺角

子良銀のほは梅もさうき

御子良子れ一そと一木梅の志 芭蕉

瘦藪やゆりたつ枝の軒の梅 千那

灰捨て白梅くしくし垣跡ぬ 元北

日當りし梅咲くろや骨牛房 膳所 支那

暗香浮動月黃昏

入相の梅はちりぬけりきくれ 風麦

武江のあとしむく旗亭の 殘夢

寝るうきも窓のゆ月や扇の梅 乙品

辛未のころ流氷のころあり
ついでにゆく梅心は日くそ梅
のほほい志きりありそれの四友
尚窓うらめかろのちや白いを
あつめをさしふ白を日くそあつめ
事れやにゆといゆきしゆり
かごとく感動身よ志けしゆり
ゆりすくろりゆりゆりゆり

よきしきまんとて悦ぶけし
とそ人守るは程を忘るるや

夢さめて又一白しや月ほ梅 嵐蘭

百八のよて迷ひや園のしめ 其角

ひら寝も能宿そらん初子日 玄草

野島や序遊のひく摘み菜 史邦

えつ衣やらや満ちるる菜糸 嵐蘭

宵は月あよありなゆゆ 如行

憶翁之客中

裾おて葉をよとちらん草枕 嵐雪

つとすく踏舟加るよああ 路通

七種や跡よらう朝くらす 其角

歌事やし疑のよげ根芽か 丈艸

くすくかりのよ鳴る芥の志 其角

眺よ去れらるるに月あくれ 同

神よきこぬよあはれ純たのり 去来

鶯の舌端落す 垣梅 伊賀 一桐

常やも屋一あられをりて 伊賀 漢石

くみ子やを詠めり礼之 其角

鶯や下駄の歯よつく小田代土 凡兆

常や窓よ火をすえあ 伊賀 魚目

やぬの雪柳もろりかす 探九

け痛ハさるの折き柳くれ 戸 卜宅

垣 日 遠水

尚白

青柳の志 伊賀 一啖

雪けや拾い 日 木白

待中乃正月 揚水

田家 揚水

妻 色是

く 越人

く 去来

露沾云 除

彼岸まくとむさしな三夜十把路通

このしや常れなりそて涅槃像 野水

花並ぬ妻ハ慈れかふい道 凡兆

之とらへ今や紀の了いせの原 沢雉

春あやふのふ草小花咲ぬ 嵐虎

さる山よみして

まをや山より出るや法門 猿雛

不世さをか子記され春あや 色蓮

春あや回養のよれ雛を 史邦

しるさあめあつるや軒の草 羽紅

泥を地や苗代水の睦つてい 史邦

蛸いまるる木蔭の竹や虫の蠢 昌房

振るや下座よなをさるる春れ雛 去来

春のよこ子れ雛のかる籠の衣 萩子

桃柳くらりありくやをんるれ子 羽紅

そこれ志境志まぬまひふ 鳥巢

里人の晴居しつる田畑うれ 嵐推

蝶の来とく一夜寝よりの葱のま ほ 半残

帛葛切て白根の樹とひ葉 加 桃妖

いのほりうもすむや潦 伊賀 園風

日の影やとまこれよの親すめ 珠碩

石の鞍ゆむ来りのすもや縁の先 土芳

園の夜や棠茂まこりてや衝 芭蕉

越より飛浮入りよとて葱の
つりのあやまきいそらとて送る

あまの山流し

さあまのい

鶴の巢の樟の枝枝よ日八入ぬ 凡兆

よもより見えんや中の一の如 伊賀 石口

子や待ん餘りや花のさるあり 秋風

いそりあく申け拍子や雉子あや 芭蕉

芭蕉巻のふるまを紡

草草小鋸洗しあやこれ 曲水

木風助旅して見ると那ふあ 戸 小倉

畫讚

山吹やう後の焙炉に白ふ時

芭蕉

白玉れあよまいつく梅られ

車来

つらさりのよこやまのいろ
ありきれの髪けつらんまわ
ちりしとけき
さまをうへ

カウカウ 竹弁もろも芳やちりの梅

羽紅

蝸牛弁ふせつるつらまの梅

坂上氏

うらまの笠やうらまの梅

芭蕉

もろさらもさ道よはけり

伊賀 利雪

東叡ふあゝぬ

小坊まや雪よかるとて山さそ

其角

一枝ハゆぬそまう山はら

尚白

雞のおももきこゆるやま梅

凡兆

ま先よらん枝あらんら梅

丈艸

そ明のうらま候く道さら

史邦

若斎よらんまこふ花の色

并那

葛城の海をよるる

松んつゝまよぬり 沖の顔 色意

川の田花垣の庄八りのつゝ
あはれの八重桜此料 又詩
らもつゝと云 傳ええんを
死を

一里ハそれ 花守の子孫也

云又の墓末武谷中に
三歳を おれ九年の好み
地よるちぬ墓のおも 桜花垂
つゝりかしく 母花ゆここと
つゝてりれ 桜とたつて 後
他の墓程こらゝ 咲れけれと

まうりや花吸 蜂の往還り 園風

知人よあしり とあえくれ 去来

あゝ僧の矯り 姿の都れ 凡兆

浪人のやとらる

嵐を春の夜あけり 花靄 半残

醒きこられ 窓中 花ゆふ 伊賀 長眉

これも奥まじや
うのには深く 吹く

大峯やの 奥のあのみ 曾良

道灌山よのほろ

乃澹やふたりの代と見か 嵐

源氏の弦をさそく

様子に夜ちるふれ辛うく 羽紅

庚午の歳家を焼く

焼よりけきも花らりはほ 北枝

ふれあや伽藍の樞をけ 凡花

海棠たし風を満より夜の月 普船

大和の脚乃とき

草臥とちるはや敵のふ 芭蕉

ふらや躑躅よけは尾のひこ 探九

やさうし海はんもや夕日新 智月

兔角しつゆふつちし流生也 山川

鶯のみよまうあてりらるる 式之

木曾塚

其まの石もなほ木曾れる 乙羽

春は花のつれづれに初陽の堂に就く 曾良

望湖水惜春

春を去るをしのびて人となりて 芭蕉

茶子茶